

議 長 受付番号第5号、南雲まさ子君の一般質問を許します。登壇願います。  
10番 南 雲 議長のお許しをいただきましたので、通告に従いまして一般質問を行わせて  
いただきます。受付番号第5号、質問議員、第10番、件名、RSウイルス感染  
症対策と子育て支援の拡充を。

要旨。(1) RSウイルス感染症は、子供や高齢者が重症化する感染症で、  
予防のためにワクチンが薬事承認されています。そこで、本感染症の症状や予  
防方法の周知、ワクチンの費用助成についてのお考えは。

(2) 読書は新しい世界を知ることや知識を習得し、夢や希望を育み他者と  
のコミュニケーションにも役立ち、読解力を身につけられる唯一無二のものと  
す。本町では、ブックスタート事業で3、4か月児健診で絵本を2冊プレゼン  
トしています。この事業の後押しのため、セカンドブックスタート事業を創設  
するお考えは。

(3) 子育てしやすい環境を整えるため、赤ちゃんと一緒に外出した際、お  
むつ替えや授乳ができ、また搾乳もできる赤ちゃんの駅を設置するお考えは。

町 長 それでは、南雲議員の御質問に順次お答えをいたします。

RSウイルス感染症は、5類感染症に指定されている急性の呼吸器疾患で、  
接触感染、飛沫感染で感染が広がり、2歳までにほぼ全員が少なくとも一度は  
感染すると言われております。

年齢を問わず、何度も感染を繰り返しますが、症状としては、発熱、鼻水、  
せきなど風邪のような症状が数日続き、多くは軽症で回復します。しかし、初  
回感染時には、より重篤化しやすいと言われており、特に生後6か月以内に感  
染した場合には、細気管支炎や肺炎など重症化することがある感染症でござい  
ます。

以前は、秋頃に感染のピークを迎えておりましたが、最近は春から初夏にか  
けて感染者が増え、夏に流行のピークを迎えている状況でございます。

次に、RSウイルス感染症の予防方法としては、手洗いやアルコール消毒な  
どの感染症対策が基本でございますが、予防接種として2種類のワクチンがあ  
り、60歳以上の成人のほか、重症化リスクの高い50から59歳を接種対象とする

ワクチンが令和5年6月に薬事承認され、接種費用が約2万5,000円程度と言われております。

また、産婦に接種を行うことで、新生児及び乳児におけるRSウイルスを原因とする下気道疾患の予防を目的とするワクチンが令和6年1月に薬事承認されており、接種費用が3万円から3万8,000円程度と言われております。

RSウイルス感染症の予防法につきましては、まず町広報やホームページ等を活用し、情報提供及び予防啓発を図ってまいります。

また、予防のためのワクチン接種費用の助成につきましては、ほかの自治体を調査いたしましたところ、神奈川県内にはなく、全国でも約20数件の自治体において実施されておりますので、十分な情報収集を行い、可能な範囲で対応してまいります。なお、予約制でございますが、寄診療所ではRSウイルスワクチンが接種可能となっております。

2点目の御質問にお答えをいたします。

町では、赤ちゃんと保護者が絵本を介してゆっくりと心触れ合うひとときを持つきっかけをつくることを目的として、ブックスタート事業を実施しております。

生後3から4か月頃のお子さん向けの絵本を推奨している4冊の中から2冊を選んでお渡ししております。子供が成長するに従って、お勧めの本も変化していきますし、子供の読書習慣も日常生活を通して形成されるものであり、家庭、地域、学校などの関わりにおいて変化していくため、子供の読書活動の機会を増やし、知識や読解力を高めていくことが必要と考えております。

セカンドブック事業とは、幼児期のお子さんを対象として、年齢に合った絵本を新たに渡す取組のことで、子供の読書習慣の形成が期待されており、ほかの自治体では、その時期に合わせたお勧めの本を配布されております。

神奈川県子ども読書活動推進に係る取組状況調査の令和6年度調査によりますと、神奈川県内18市町村で実施されており、実施している自治体では、図書館の活用と連携した事業として、幼児期に実施する健診の際に本の引換券をお渡しし、図書館で本を選んでいただきお渡しするといった形で実施されている

事例が多く、この取組を通じて家庭での親子の読書活動の広がりや、子供自身が読書の楽しさを知るよいきっかけづくりとして、自発的な読書活動につながっていくことも期待されます。

この事業はすばらしい事業でございますので、本町も早々に実施できるよう具体的に検討を行ってまいります。

3点目の御質問の、赤ちゃんの駅の設置についてお答えをいたします。

赤ちゃんの駅とは、赤ちゃんと一緒に外出した際、おむつ替えや授乳ができ、また搾乳ができるスペースのことです。この取組は、全国的にも広がりつつあるようでございまして、神奈川県内においては横浜市、大和市、厚木市、開成町などが取組を実施しております。

具体的な設備といたしましては、おむつ替えができるベビーベッドの設置や、授乳や搾乳できる仕切りなどが備えてある場所となります。

多くの自治体は、赤ちゃんの駅として協力できる施設を自治体が登録する制度として運用していらっしゃいます。現在、本町では、赤ちゃんの駅と同等に授乳や搾乳が可能で、おむつ交換が可能となっている施設といたしましては、公共施設では、役場本庁舎内や子どもの館など4か所にあり、またベビーベッドのみを設置されているところは、ハーブ館、七つ星ドッグラン&カフェと町内にある公園の3か所のトイレの合計5か所に設置されている状況であります。

赤ちゃんを連れていったときに急におむつ替えが必要となった場合や、授乳、搾乳ができる場所があると、乳幼児がいる保護者にとっては、外出時には便利で非常にありがたく、そのような環境を整えることは、子育て支援にもつながっていくと考えております。

設置につきましては、こども・子育て応援宣言をした町として、公共施設のみならず、そのほか、民間施設や事業者の方々など、町全体にて御理解と御協力を得られるよう、先進地の事例等を参考にしながら、設置が可能な施設から対応してまいりたいと考えております。以上でございます。

10番 南 雲 一定の御答弁ありがとうございました。

再質問に移らせていただきます。

1項目め、RSウイルス感染症対策についてですが、このRSウイルス感染症は認知度が低いと思われますので、説明の部分が多くなることを御承知おきください。

新型コロナウイルス感染症が、令和5年5月8日に5類に移行して2年が経過し3年目に入りました。この間、新型コロナが流行していた時期には、流行が抑えられていたA型溶血性連鎖球菌咽頭炎や咽頭結膜熱、RSウイルスなどの感染症が流行し感染規模が大きくなっています。いずれも子供に多い感染症ですが、過去10年と比較して2倍から3倍程度の感染者が報告されています。

その原因は、コロナ禍の感染対策の徹底で感染しなかったため免疫を得ることができなかった。また、免疫が低下して、感染が広がりやすくなったとの報道がありました。

こうした感染症は、これまでの流行の季節とは違う季節外れの流行となっていて、改めて従来からの感染症に対してもしっかりと対策していく必要があると思います。

RSウイルス感染症は近年の研究結果では、幼児や高齢者、ぜんそくなどの慢性疾患を持つ方などは入院が多く、その危険性が指摘されています。特に、生後6か月以内の新生児、幼児、乳児への感染や、低体重児、心臓、肺、神経、筋肉などに基礎疾患がある場合や、免疫不全がある場合は重症化の可能性が高まります。

RSウイルスは2歳になるまでほぼ全員が感染し、風邪の症状にとどまる場合が多いものの、日本では推定で毎年約3万人の2歳未満児が重症化し入院しています。中でも生後1、2か月の入院数が最も多いことから、早期の予防策が待望されていました。

昨年1月、母子免疫による新生児、乳児の予防を目的とするRSウイルスワクチンが薬事承認され、同年5月に発売となりました。このワクチンは、生まれてくる赤ちゃんをRSウイルス感染症から守るために、妊婦が接種するワクチンです。妊婦に接種することで、母体で作られた抗体が胎盤を通じて胎児へ

移り、赤ちゃんのRSウイルスによる肺炎や気管支炎の発症を予防するものです。

日本など18か国の妊婦が参加した臨床試験で高い有効性が確認され、日本小児科学会も推奨しています。また、令和4年総務省統計局の報告によりますと、65歳以上になると肺炎による死亡率が急激に上昇し、肺炎による死亡者の98%が、65歳以上の高齢者であるとの数字が示されていて、まさに肺炎は高齢者の大きなリスクとなっています。

肺炎で亡くなる人は国内において約7万人と推計されており、長く死因の第4位だった肺炎が、平成23年にはがん、心臓病について第3位となり、現在第6位の誤嚥性肺炎と合わせると、老衰を抜いて第3位を維持しています。

さらに、平成29年、老衰とされています終末期の肺炎では、抗菌薬等の強力な治療を控えるとの新たなガイドラインが出され、老衰による死亡者は実際には肺炎による死亡が多いと言われています。こうしたことを鑑みると、今後の超高齢社会を迎え、高齢者の肺炎に対する対策は非常に重要になってきます。

高齢者の場合、慢性の心臓疾患や呼吸器疾患、腎不全、肝機能障害、糖尿病等の基礎疾患を持っている方が多いため、免疫力の低下から肺炎などの感染症にかかりやすく、かかると重症化するのが現状です。

入院治療も必要になり、退院できても介護が必要になる、介護度も上がることも多くなるため医療費はもちろん、御家族や介護施設、人手不足の介護人材にも負担が増えると考えられます。たとえ、基礎疾患がなく元気に過ごしていても安心はできません。特に75歳以上の後期高齢者は、肺炎をきっかけに体力が低下し、介護が必要になることもあり、お亡くなりになることもあります。

社会保障費が増加の一途をたどる中、高齢者の肺炎による医療費や介護費の影響も大きくなってきます。そのため、国をはじめ、地方自治体では積極的に高齢者の肺炎予防に取り組んでいます。

本町では、インフルエンザ、肺炎球菌ワクチンの助成を行っていますが、本町の高齢者のインフルエンザ、肺炎球菌ワクチンの最近の接種状況を伺います。

子育て健康課長      それでは、御質問のありました肺炎球菌ワクチンとインフルエンザの予防接

種の接種状況ということで、過去3年間ということでもよろしいでしょうか。

それでは、まず令和4年度なんですけど、肺炎球菌が106人、インフルエンザが2,052人です。令和5年度につきましては、肺炎球菌が142人、インフルエンザが1,930人、それから令和6年度が肺炎球菌が44人、インフルエンザが1,831人という接種状況となっております。以上です。

10番 南 雲 ありがとうございます。肺炎球菌は5年に一度ということで、やはりこのような数字だったと思いますけども、インフルエンザも非常に多く、皆様の肺炎に対する関心の高さがうかがわれます。

肺炎を起こすウイルス感染症として、注意喚起されているのがRSウイルス感染症です。呼吸器合胞体ウイルス感染症の略で、風邪症状を伴う呼吸器感染症として知られています。

加齢や基礎疾患があるなどで、免疫が落ちて高齢者が感染すると重症化して肺炎になるリスクが高まるとされています。日本では、感染症発生動向調査の小児科定点把握の5類感染症として毎週、約全国3,000か所の小児科医療機関から感染者数が報告され、小児における発生動向が把握されていますが、成人、高齢者での発生動向の調査はありません。

しかし、日本の医療機関における調査報告では、小児の発生動向と成人、高齢者の発生動向は連動しているという報告もあり、小児のRSウイルス感染症が流行している時期においては、成人、高齢者においてもウイルス感染の重症化のリスクにさらされていると考えられます。

特に高齢者の場合、感染症発生後の重症化、死亡、退院後の自立生活、介護にも大きな影響を与えることも知られています。

そこで、御答弁に広報やホームページ等で予防の情報提供や普及啓発をしていくとのことですが、それとともに毎週発生動向が発表されていますので、感染症の発生が一定レベルを超えた場合、町、SNS等でも流行情報を発信していったらと思いますが、御見解を伺います。

子育て健康課長 ただいまの御質問にお答えいたします。

保健所からですね、毎週定点報告が来ておりまして、その情報が神奈川県

感染情報センターから足柄上地域の情報として来ております。

町民へ情報を提供していくためにですね、国立健康危機管理研究機構、こちらの感染症情報提供サイトデータですとか、神奈川県衛生研究所、感染情報センターのデータについて、現在の感染状況等が把握できるサイトがございますので、こういったサイトを活用しまして、町民の方にリアルタイムで今の感染状況をお伝えしていくようにできればと、今後は考えております。以上です。

10番 南 雲 リアルタイムということで、ぜひよろしく願いいたします。

日本全体における成人、高齢者における感染状況については、毎年60歳以上の成人、高齢者において、約70万人がRSウイルスに感染発症し、そのうち約6万3,000人が入院、約4,500人が死亡していると言われております。

これは感染症に感染した方の10人に1人が入院し、入院した方の約15人に1人がお亡くなりになっているという状況です。また、このRSウイルス感染症は、現在多くの方が予防接種しているインフルエンザと比べると、重症化のリスクは、実はインフルエンザと同等もしくはそれ以上とされています。

肺炎を起こすリスクは、RSウイルス感染症のほうが高く、入院期間も長くなるとの報告もあります。さらに、RSウイルス感染症は飛沫感染や接触感染で広がるため、病院や介護施設など抵抗力の落ちた高齢者が多く、閉鎖された空間で集団感染のリスクが高まると言われております。

平成30年に、高知県で発生した老人介護施設でのRSウイルス感染症の集団感染では、31人が感染し、そのうち4人がお亡くなりになるという事例がありました。

しかし、RSウイルス感染症を知っている方が非常に少ないというのが現状です。今まで、成人、高齢者、RSウイルス感染症がインフルエンザや新型コロナのような感染予防のワクチンや感染しても治療薬がないので、病院、クリニックで検査しないことで、RSウイルスに感染していることがほとんど知らされていません。

集団感染のようなことが起きない限り疾患の認知がされないのが現状であ

り、適切な診断の機会が少なく、肺炎の原因の感染情報として見逃されてきたRSウイルス感染症といっても過言ではありません。

そのため、厚生労働省では、医療ニーズと疾病負荷などから開発優先度の高いワクチンとしてRSウイルスワクチンを位置づけ、内閣官房のワクチン開発生産体制強化戦略としても重点感染症として開発を支援すべく、ワクチンとして位置づけされていました。

そして、令和5年9月に成人、高齢者向けのRSウイルスワクチンが日本で薬事承認され、令和6年4月から接種可能となりました。

そこで、この成人、高齢者向けのワクチンと昨年1月に薬事承認された母子免疫による新生児、乳児のRSウイルスワクチンの接種費用は、高齢者対象が2万5,000円程度、妊婦対象が3万円から3万8,000円程度となっていますが、この接種する間隔については、どのようになっているのか伺います。

子育て健康課長 接種間隔についてなんですけれども、あくまでワクチンサイトでの情報でございませぬ。また、長期的な効果はまだ不明であるというところもございませぬので、そこら辺をです、一応、御承知いただきたいと思ひますけれども。

60歳以上と、あと2種類あるんですけども、妊婦さんと胎児の方の抗体をつけるワクチンです。こちら両方とも接種については1回という情報となっております。

議 長 接種間隔のお話だそうです。

子育て健康課長 すみませぬ。ちょっと手元に間隔の資料がございませぬので、申し訳ございませぬが、両方とも費用につきましては1回という情報となっております。

胎児のですね、抗体をつけるワクチンですが、胎児については1回というところで、その数が間隔というよりは、胎児には1回というところございませぬ。

10番 南 雲 費用も高額となっておりますけれども、RSウイルス感染症に高齢者が罹患すると重症化すると入院治療も必要になり、退院できても介護が必要になり、介護人材にも費用が増える、また、医療費や介護費の影響も大きくなってきます。

そこで、このような状況を考えたとき、RSウイルスワクチン接種費用との費用対効果についてのお考えを伺います。

子育て健康課長 費用対効果のお話なのですが、RSウイルス感染症に対する特効薬というのは、ないということでございます。症状に合わせた対症療法になるということですので、基礎疾患を有する方ですとか、小児は特に重症化のリスクが高いようでございます。

重症化した場合は、治療費が多くかかってしまう可能性がありますので、RSウイルスワクチンを接種することについては、感染症による負担を減少させる上で有効でありまして、重症化させないためにもですね、また、医療費のことを考えますと、費用対効果にも優れていると考えております。以上です。

10番 南 雲 やはり、ワクチンの費用助成については、国の動向に注視していかれるということなんですけれども、20自治体程度の助成が行われていて、まだ神奈川県ではどこも行われていないということで、公費助成導入については承認されて間もないので、少ないということなんですけれども、肺炎を起こすリスクの高いRSウイルス感染症から町民を守ることは非常に大事なことです。乳幼児、高齢者の感染予防という選択肢ができましたので、よく調査研究されて、ワクチン接種の公費助成の御検討を要望いたします。

続きまして、2項目めのセカンドブックスタートに移らせていただきます。

セカンドブックスタートなんですけれども、松田町にとって宝の子供たちにもっともっと本に親しむ機会と習慣をつくっていくとの思いで、本との出会い、きっかけをつくることは非常に大事だと思います。

ブックスタート事業として、本町でも3、4か月児健診で絵本を2冊プレゼントしています。それに続く事業として、もう少し成長されたときに本を贈呈する事業が、全国的にも多くの自治体で取り組まれています。

贈呈する年齢については、2歳、3歳、小学校入学時など、それぞれの自治体で様々です。セカンドブックスタート事業は、近隣自治体では、大井町が2歳6か月児健診のときに絵本引換券を配布、南足柄市では3歳6か月児健診時に5種類の絵本の中から1冊を贈呈、山北町ではセカンドブック時スタート事

業として3歳児健診時に5冊の絵本の中から1冊を贈呈、さらにサードブックスタート事業として、小学校新1年生に5冊の本の中から1冊選んだ絵本を贈呈しています。

セカンドブックスタート事業に前向きな御答弁をいただきましたが、贈呈の時期についてはどのようにお考えかをお伺いたします。

子育て健康課長 それでは、御質問にお答えさせていただきます。

まず、ブックスタートにつきましては、先ほど議員のおっしゃられたとおり、3、4か月児に対してですね、そのときに健診の際に4冊の中から2冊を保護者に選んでいただいております。

セカンドブックにつきましては、この事業をやる方法といたしまして、今、想定しているやり方といたしましては、松田町の場合は3歳児健診等がありますので、3歳児健診の際に本の引換券をお渡ししまして、図書館の利用促進も併せまして、町の読書活動の推進という観点からも、事業を展開する場合は、こういった方法を今、想定しております、今後ですね、関係部局と連携して、取組につきましては具体的に検討していきたいと考えております。以上です。

町 長 ちょっと前長い話があつてね、やるのかやらないのかよく分からないような話がありましたけど、私の答弁の中で、本当にこの事業はすばらしいなと思って、ほかの町がやっていて、何でうちがやっていないんだろうなというふうに正直思いました。

ですので、ただ、今すぐということになると、予算がこの分で予算を組んでいないので、一番、順番から言うと9月の補正とか、いうことでやり始めるというふうに答弁しておかないと、多分、再来年とかになっちゃいますから、しっかりとやるように進めていきます。以上です。

10番 南 雲 ありがとうございます。3歳児健診ということでございましたけど、3歳頃は言葉の発達が著しく絵本の内容もよく理解し、楽しめるようになる時期であり、読み聞かせに適した年齢となっていると言われております。よく、3歳時にセカンドブックスタートをされるということで、よろしくお願いたします。

本町の絵本を通して、親子が楽しい時間を過ごしてもらうことが目的のブックスタート事業ですが、3、4か月児健診で2冊の絵本をお渡ししていますが、そのときはどのようにしてお渡ししていただけるのか、その様子を伺いたいと思います。

また、先月、5月27日に実施されましたブックスタート講座については、どのような形で行われたのかを伺います。

子育て健康課長      それでは、御質問にお答えさせていただきます。

3、4か月児へのブックスタートの本の贈呈の方法なんですけれども、先ほどもちょっと繰り返してしまっていますが、3、4か月時の健診の際にですね、4冊の絵本の中から2冊好きな本を保護者に選んでいただいております。

本をもらった方から感想とか申し上げますと、お子さんに本を読んであげる機会が増えたですとか、プレゼント感覚で喜んで受け取ってもらっているというところですかですね、自分で持っていない本をもらえるというところがよいという感想がございました。

それと、あと5月27日のブックスタート講座についてなんですが、こちらにつきましては目的としてですね、健康づくり普及員の方に乳幼児の健診の際に絵本を読み聞かせしていただくんですけども、そのときに読み聞かせをするときの講演ですね。読み聞かせをするときのそれができるようになるための講演を大人も子供も楽しめる絵本ということで、絵本の効果のよさですとか、子供はどう絵本を聞いているかですとか、読み聞かせのやり方ですね。お薦めの絵本等について、この講座を12名の方を対象に開催いたしました。以上です。

10番 南 雲      対象が健康普及員の方ということで伺いましたが、これ、頂いた保護者の方がどのように活用していいかなどのアドバイスも必要だと思います。NPOブックスタートは、ブックスタート事業の各種運営をサポートするための各種資料を発行し、自治体に無料で提供していますので、参考にするなどにしていただきたいと思いますと思いますが、お考えを伺います。

子育て健康課長      今、御質問のありました議員の参考にさせていただいて、今後のブックスタ

ートの事業展開に活用させていただきたいと思います。以上です。

10番 南 雲 よろしくお願いたします。第3次松田町子供読書活動推進計画に松田町社会教育委員会が調査した家庭における読者活動アンケートを参考に、現在の読書環境を把握し、研修を行ったところによりますと、健診時にブックスタート事業としてファーストブックが手渡され、令和4年度の調査では、よく活用した人が48%、時々活用した人が29%で、約8割の人が活用していて、一定の効果があつたと言えますとあります。

また、ブックスタートから時間がたち、図書館から足が遠のいた利用者がセカンドブックをきっかけに再度来館されるような効果も上がっている自治体もあります。

このように、一定の効果があるブックスタート事業、また、セカンドブックスタート事業を有効な事業としていくため、小学校、中学校の児童・生徒たちの読書習慣を身につけていく工夫が必要だと考えます。

文化庁の調査によると、読書が好きと回答した小学生のテストの正答率は、国語に限らず、理系科目も平均を上回っているとなっています。

また、読書離れは進行したが読書が大切という意識は変わらない。書店がない自治体が増えている中で、書店という本との出会いの場は減少しているとして、子供たちが本と身近に出会える学校図書館への重要性が高まっているともしています。また、ビブリオバトルという本を読む取組をしている自治体もあります。

ビブリオバトルとは、発表者が読んで面白いと思った本を持ち寄り、5分間で本を紹介する。発表の後に参加者全員でディスカッションをして、最後にどの本を一番読みたくなつたかを投票で決めるものです。

人を通して本を知り、本を通して人を知るコミュニケーションの場としても取り上げられています。

最後に、教育長に、子供たちの読書の取組についての御所見を伺いたいと思います。

教 育 長 御質問ありがとうございます。議員、御指摘のとおり、最近スマートフォン

が普及したりとか、あるいは動画が普及したりとかね、あるいは家庭での読書機会が減少したりとか、全国的に子供たちの読書離れや活字離れが進んでいるというのが現状があるというふうに思います。それは、松田町でも同様かなというふうに思っております。

一方ですね、文部科学省の全国学習学力状況調査の中で、家庭での蔵書数とか、あるいは読書機会と学力との間に明確な相関関係があるという結果も出ています。

例えばですね、家庭での蔵書数が10冊以下の子供と、200冊以上の子供との比較しますと、全国学力学習状況調査の正答平均率が20%の差があるというような結果も出ています。

このことからですね、読書環境というのが大きく子供たちの学力に影響するんじゃないかなというふうに考えられます。

議員、御指摘のとおりですね、読書というのは学力だけではなくて、子供の心の教育とか、あるいは感性の形成とか、あるいは思考力の助長とかね、そんな部分でもかなり大きな影響を及ぼすんじゃないかなというふうに思っています。

松田町でもですね、こうした状況を踏まえまして、まず、子供たちの読書習慣を身につけるということで、小・中学校では朝読書を継続的に実施をしています。それとか、あるいは地域の図書ボランティアの方がですね、学校図書館に入っていて、飾り付けをしていただいたりとか、あるいは推薦図書を紹介していただいたりとかね。そんなような取組を通して、本に親しむと、そういう機会を与えています。

それから、読み聞かせボランティアも学校に入っています。その方々が特に小学校低学年では読み聞かせボランティアが入っていただくことによりまして、子供の本に関する興味を高めると、そんなような効果もあるんじゃないかなというふうに私は感じています。

松田町、本町では、このように、地域と協働しながら、読書環境づくりというのを進めている現状があります。

これにつきましては、今年度、令和7年度からコミュニティスクールが導入しましたので、より一層、学校と地域が協働して進めることができるんじゃないかなというふうにも思っていますし、これまで以上に学校、地域、家庭がより深く連携して、子供たちに読書の楽しみとか、あるいは進んで本を手にとると、そんなような読書環境づくりをしていきたいなど、そんなふうに考えています。

10番 南 雲 ありがとうございます。

続きまして、3項目めの赤ちゃんの駅事業に移らせていただきます。

赤ちゃんの駅とは、先ほど御答弁にもありましたので、ちょっと割愛させていただきますけれども、気軽に外出ができる環境を整えて子育てに優しいまちづくりを進めるとともに、民間施設に協力を求めることにより、地域社会全体で子育て家庭を支える機運の醸成することも目的としています。

赤ちゃんの駅として登録された施設には、全ての人に分かるように、ステッカーや旗などのシンボルマークを掲示して、ホームページで公共、民間問わず検索できるようにしている自治体が多くあります。

本町でも、赤ちゃんの駅という名称ではなく設置しているということですが、シンボルマークを考案して、ステッカーを作成し、2階庁舎の授乳室というのがすごく奥にあって分かりにくいので、このような分かりにくいところには、例えば庁舎入り口にのぼり立てを立てて、赤ちゃんの駅として設置を分かりやすくしていったらどうでしょうか。お考えを伺います。

子育て健康課長 赤ちゃんの駅という位置づけはですね、本町にはまだないんですけれども、搾乳ができることを示すステッカーというのが、神奈川県からありますので、まずは搾乳ができる可能な施設につきましては、県から頂いているステッカーで対応していきたいと考えております。

また、シンボルマークについては、赤ちゃんの駅の位置づけと併せてそちらのほうも今後考えていきたいと思っております。以上です。

10番 南 雲 よろしく願いいたします。

開成町では、イメージキャラクターのあじさいちゃんが描かれた15センチ角

のステッカーが目印で、うちのほうも進めていただけるということなんですけれども、公共施設のほかにさがみ信用金庫とか中栄信用金庫とかマックスバリュ等に設置されています。

本町では、みやま運動広場が人工芝化されて、乳幼児がいる御家庭の御兄弟がみやま運動広場に応援に来たときに、例えば寄自然休養村管理センターに赤ちゃんの駅を設置する、それで、先ほどの質問の中でもバーベキューなどで、町内外からの方のハブとしていくとの話もありましたが、そういう乳幼児を連れての方がバーベキューで訪れたときも安心しておむつ替えや授乳、搾乳ができる環境も必要だと思います。

公共施設や、金融機関のような民間施設に赤ちゃんの駅の拡充をしていくことやそのために提供施設を募集し、こんなシンボルマークができましたと御協力を求めていく必要があると思いますが、お考えを伺います。

子育て健康課長 公共施設に限らずですね、民間の施設につきましては、今、全ては調査しておりませんが、町で把握している、そういったおむつ替えが可能であるところは、新松田駅、松田駅にございます。

金融機関等にはまだ設置はしてないんですけれども、外出時には赤ちゃんを連れている方にとっては、特に赤ちゃんを連れて多くの方が利用する施設については、こういった施設は必要であると感じます。

子育て世帯が安心して外出できる環境づくりの一つとしても必要でありますので、先ほど町長の答弁にもありましたけれども、民間施設とか事業者などにつきましては、事業者などの御理解とか御協力が必要でありますので、今後、先進地の事例を調査していきまして、例えばここにあつたらいいですとか、赤ちゃんのいる世帯の家庭訪問の際ですとか、あと、赤ちゃんの保護者と面談する機会とかありますので、どういうところにあつたらいいですとか、声を聞ける機会がありますので、そういったときにも必要な場所とかお聞きしていきながら設置につきましては、できるところは対応してまいりたいと考えております。以上です。

町長 何かね、ほわっとした話でやるのかやらないのか本当分かんないな感じですよ

けどもね。実際、この赤ちゃんの駅についていろいろ勉強すれば勉強するほど、やっぱり先進的なところはちゃんと民間企業さんに、補助を出したりだとか、そういうふうにやっていて、町ぐるみでやる中で、事業者さんだけをお願いするだけではなかなか広がっていかないということはよく存じ上げています。それは多分存じているんだろうと思いますけどもね。

なので、やっぱりそういった制度を全体的につくった中で進めていく。旗を作るにしても、ステッカーを作るにしても、消耗品なり何なりというふうなところのお金の使い方というのはあると思うんですけどもね。

一旦、飲食店組合の組合長さんには、そのようなボールは1回投げてはいるんです。

やっぱり、子育て応援宣言をした後に、これがつながっていきなきゃいけないので、子育て応援宣言に対する賛同をしてくれる事業者さんのところに認定をして、認定したところで、例えばベビーカーで来るんだったら段差があるところだったらスロープを設けましょうだとか、先ほど言われたようなベビーベッドを設置しますだとかいうふうなところとか、授乳するんだったら当然カーテンをつけなきゃいけないとかいったところに対して、補助が我々できつつ、町ぐるみで全体でやっていくとしないと、旗だけ上げて頑張りますよ、エイ・エイ・オーじゃ、なかなか前にいかないの、そのようなことを一つ考えています。以上です。

議 長 もう時間ですので、一言で。

10番 南 雲 最後、もう時間ですね。赤ちゃんの駅というのは、本当に神奈川県でもね、低体重児の方が本当に苦労されて、リトルベビーハンドブックも低体重児の方の発育曲線が母子保健手帳には1キロからしか書けなくて、本当にそういった御苦労があったということを知って、神奈川県でも搾乳ができるマークも作ってリトルベビーハンドブックも作成したという背景がございます。本当に、少しでもつらい思いをされている低体重児を出産されたお母さんとかに、多く授乳、搾乳、おむつ替えができる赤ちゃんの駅の設置を進めていってほしいと思います。以上で一般質問を終わります。

議

長 以上で、受付番号第5号、南雲まさ子君の一般質問を終わります。

暫時休憩いたします。15時20分より再開いたします。 (15時00分)